

# 義太夫

## 義太夫協会会報 第 117 号

令和 6 年 1 月 1 日

一般社団法人 義太夫協会 発行

〒104-0045

東京都中央区築地4-3-12

秀和第2築地レジデンス706号

Tel. 03 (6264) 3047

Fax. 03 (6264) 3048

<http://www.gidayu.or.jp>

### 原道生会長、池田弘一先生、 永谷浩司氏を偲んで

義太夫節保存会会長 竹本駒之助

年頭にあたり新年のご挨拶を申し上げます  
ところ、とても悲しいお知らせをすることに  
なりました。

当協会の原道生会長が、昨年十一月二三日  
にお亡くなりになりました。生前、ご自分  
にかあつた場合は周囲に知らせないで、葬儀  
は親族だけで行なって欲しいと強く希望され  
ていたそうで、ご葬儀をすまされた後にご報  
告を受けました。

昨年の十月初め、原会長より協会へ多大な  
ご寄付を賜りました。そのお礼と、ご体調が  
すぐれないとのことでお見舞いのお電話を差  
し上げました折、「私より半年お姉さんの駒  
之助師匠が舞台に立ってらっしゃるのに弱音  
は吐けません」とおっしゃいました。直後に  
ご入院。それが原会長との最後の会話となり  
ました。

前任の故波多一索氏より会長を引き継がれ  
ましてから七年間、協会のために並々ならぬ  
ご尽力をいただきました。また定例公演のみ  
ならず、個々が催す演奏会にも小まめにお出  
ましく下さり、その柔和なお人柄で皆に慕わ  
れた会長さんでいらっしゃいました。  
大切な存在を失い、協会員一同、いまだ深  
い悲しみと寂しさの中におりますが、ご冥福  
をお祈りするばかりです。

また八ページに掲載されていますとおり、  
昨年五月に神田外語大学名誉教授の池田弘一  
先生、昨年六月に永谷商事会長の永谷浩司氏  
が相次いでお亡くなりになりました。

池田先生は本牧亭時代から女義を聞き続け、  
演奏会場ではいつも最前列の真ん中が先生の  
指定席でした。今でもふと、そこに先生が座っ  
ていらっしゃるような気がいたします。

永谷会長はご自分の手帳に女義の公演日と  
入場者数を書きこむほど、常に女義のことを  
お気にかけてくださいました。また大相撲に  
も造詣が深く、国技館に連れて行っていただ

いたことも懐かしい思い出です。  
女流義太夫を応援し、盛り立ててくださっ  
たお二人に心からの感謝とともに、ご冥福を  
お祈り申し上げます。

昨年十月で国立劇場が閉場、また日本橋永  
谷ビル建て替えに伴い、お江戸日本橋亭も閉  
場となりました。本年一月からは新たな会場  
で定期演奏会を行なってまいります。

私たちを取り巻く環境はますます厳しいも  
のとなりませんが、永らく続いてまいりました  
毎月の公演をこれからも絶えることなく続け  
ていきますよう、協会が一丸となり前に進ん  
で参ります。引き続きご支援のほど、何卒よ  
ろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、皆様の本年のご多幸を  
心よりお祈り申し上げます。

#### ◆協会事務所 東銀座に◆

お江戸日本橋亭のある日本橋永谷ビル二階  
に入居していた本協会事務所は、ビルの建て  
替え（次ページ参照）に伴い、昨年七月末に  
東銀座の新事務所に移転いたしました。一つ  
前の事務所があった東劇ビル裏手にあるマン  
ションの七階です。

新住所・新電話番号は右上（タイトル下）  
の囲みに記載しております。営業時間（月曜  
（金曜 十時～十七時）内でも事務員不在の  
場合がございましたので、お運びの際は事前  
にご連絡ください。

〈目次〉

原道生会長、池田弘一先生、永谷浩司氏を偲んで(竹本駒之助) …… 1  
 協会事務所 東銀座にお江戸日本橋亭休館 …… 2  
 祖先祭開催  
 義太夫教室 第七五期  
 豊竹若太夫襲名という喜び(豊竹呂秀) …… 3  
 七月公演「義太夫の動物たち 其の壱」 …… 3  
 『鳥獣戯画』の作曲(鶴澤津賀寿) …… 3  
 九月公演「名優の当たり役②」 …… 3  
 十月公演「肩衣」(鶴澤賀寿) …… 3  
 「語ってみよう! 義太夫節!」 …… 3  
 「三味線ナビ」(鶴澤賀寿) …… 3  
 糸あやつり人形一糸座  
 学校巡回公演(竹本綾一) …… 4  
 国立劇場邦楽鑑賞会(鶴澤津賀佳) …… 4  
 フラメンコ舞踊団と  
 義太夫節の共演(鶴澤三寿々) …… 4  
 大阪の女義と瑠璃の会(鶴澤駒清) …… 4  
 協会公演のチラシを担当して(大内弘子) …… 5  
 〈義太夫とわたし〉遅れてきた応援団(宮下孝弘) …… 5  
 特別企画 大島真寿美氏インタビュー …… 6  
 計報 池田弘一氏 永谷浩司氏 原道生氏 …… 8  
 名優と義太夫節【第七回】 …… 8  
 十七世中村勘三郎(竹本葵太夫) …… 9  
 協会・正会員の主な動き …… 10

お江戸日本橋亭休館

平成二三年度より、毎月の「女流義太夫演奏会」の会場の一つとして使用していたお江戸日本橋亭が、ビル建て替えのため、この一月より当面の間、休館となりました。近年は

「女流義太夫演奏会」の主会場としてお客様にも演者にも定着しておりましたので、寂しい限りです。

今後は、紀尾井小ホール、深川江戸資料館小劇場、ティアラこうとう小ホールなどを使用していく予定です。公共のホールでは予約方法が異なるため、今後は一年分の演奏会場をまとめて事前にお知らせすることが難しくなります。お客様にはご面倒をおかけいたしますが、お間違えのないよう、毎回会場をご確認の上、ご来場ください。六月までの予定は十ページ下段の「協会・正会員の今後の動き」をご覧ください。

祖先祭開催

祖先祭はコロナ禍での二〇二〇年・二〇二一年の中止、二〇二二年の理事を中心とした小規模開催を経て、昨年十一月十二日、四年ぶりに全面開催いたしました。

正会員他が集まったの法要と墓参に、茶話会も行われました。法要では昨年三月に逝去された鶴澤寛也氏のご一門から卒塔婆の寄進もあり、一同悲しみを新たにいたしました。

義太夫教室 第七五期

義太夫教室は昨年七月二二日に第七五期入門コースの修了式を行い、九月十六日より実践コースが開講中です。語りコースは竹本越孝講師が『菅原伝授手習鑑』寺入りの段、竹

本京之助講師が『寿式三番叟』を稽古しています。三味線の講師は鶴澤津賀榮です。

本年三月九日、浅草公会堂四階和室での卒業発表会に向けて、稽古に熱が入っています。



入門コース修了式の様子

豊竹若太夫襲名という喜び

豊竹呂太夫師匠(義太夫協会正会員)が豊竹若太夫の十一代目を襲名されることとなりました。「竹本義太夫」の名前は言わば永久欠番。義太夫から独立して竹本座に拮抗する豊竹座を開き、道頓堀に人形浄瑠璃全盛期を出現させた立役者の一人「豊竹若太夫」の名前が、三百年以上十代に渡って受け継がれて来た、文楽を代表する大名跡であることはご存じの通りです。十代目は呂太夫師匠の祖父であり、この襲名は呂太夫師匠の大きな目標でした。どうぞ皆様、十一代目若太夫の誕生をご一緒に祝っていただけましたら幸いです。(六代目豊竹呂太夫門下 豊竹呂秀)

## 七月公演 「義太夫の動物たち 其の巻」

元NHKエグゼクティブアナウンサーの水谷彰宏氏のご案内により、『鳥獣戯画』、『祇園祭礼信仰記』 爪先鼠の段、『連獅子』を紀尾井小ホールにて演奏しました。『鳥獣戯画』は、鶴澤津賀寿が作曲も担当しました。

## 『鳥獣戯画』の作曲

令和三年十一月に「歳松会」で長唄・義太夫掛け合いで上演した新作『鳥獣戯画』を、作者の千野喜資先生が義太夫版にして下さったものです。

思い切り義太夫らしく、愛嬌のある曲にしようと思いました。

冒頭はお寺の場面ですので、ポクポクと木魚の音を出しながら幕を上げてもらいました。そして、学僧が高山寺へ出かけるところは道行に。相撲の場面には櫓太鼓を。これらは、義太夫節の中にある手法です。

絵巻には、猿、狐、兎、蛙、珍獣、霊獣などが登場します。猿、狐は、義太夫節の中で独特な音を与えてもらっていますので、それを使っています。他の動物にはそれらしく音を当てはめてみました。

結果的に、六回ほど三味線の調子を変えなければならず、初舞台後初出演の津賀佳はアップアップしていました。

当日は、千野先生もお言葉を寄せて下さり、鳥獣戯画の絵入りの歌詞をお配りしたり、動物シリーズ幕開けの華やかな会になりました。

(鶴澤津賀寿)

九月公演 「名優の当たり役②」  
十月公演 「肩衣」

昨年九月二十日の公演は「名優の当たり役②」と題し、三代目實川延若の得意とした役に因み、岩藤・『草履打(越里・弥々)』、弁慶・『弁慶上使(越京・駒治)』、そして団七・義平次両方が持ち役であった『長町裏(越孝・越若・津賀榮ほか)』の三曲。お話は歌舞伎研究家の鈴木英一さん。錦絵そのままのような風貌を持ち、芸も良く家柄もありながら、どこか時代の流れに乗り切れなかった名優の生涯を、ご自身の観劇体験も交えつつ情熱的に語って下さいました。最後の『長町裏』は太夫・三味線から太鼓・カネ・祭りの掛け声まで一丸となり、残暑を吹き飛ばす爽快な舞台でした。

十月公演(十三日)「肩衣」。物語に因んだ肩衣をつけることが多い演目をいくつかご紹介した後、出演する太夫に事前に伺ったエピソードをお話ししました(本物の黄八丈を使った肩衣を新調、三代目綾之助襲名披露会場のロビーに展示した肩衣を使用、など)。演目は『鈴ヶ森(佳之助・津賀榮)』と『吉田屋(綾之助・津賀花・弥々)』。目でも耳でもお楽しみ頂ける会となり、お客様がたにも好評でした。

「名優の当たり役」は来年度、三回目を予定しております。どなたの当たり役が登場しますか、どうぞご期待くださいませ。

(鶴澤賀寿)

「語ってみよう! 義太夫節!」  
「三味線ナビ」

令和五年度舞台芸術等総合支援事業では、義太夫協会として左記の二公演に出演者を派遣しました。

「語ってみよう! 義太夫節!」(越京・京之助・寿々女・三寿々・賀寿・弥々)では昨年七月からまずワークショップ、続いて本公演を実施。一月実施予定の本公演二回を含め、全八校を巡演。『寿式三番叟』ではリズムカールな曲調に、自然に手拍子が起こったり身体を揺らしながら聴き入ったり。「校歌が義太夫節に!」のコーナーでは、自分たちの校歌が一体どんな曲になるのか?という子どもたちの好奇心を舞台上でひしひしと感じました。ワークショップでお稽古した代表者が衣裳をつけて舞台に登場すると、どの学校でも大歓声。全員で行う「口上」も息びったりで、出演者一同、毎回感激致しました。

「三味線ナビ」は、中国から渡ってきた三味線が沖繩の三線、義太夫、長唄、津軽と変化する発展して行く過程を演奏とお話で紹介する公演です。義太夫協会からは津賀榮・賀寿が参加しました。それぞれの楽器の演奏における役割や音色が様々であることに、子どもたちは興味津々。ワークショップに参加し、その後もお稽古を重ねてきた代表者の演奏や、普段ではあり得ない各ジャンルの楽器が勢揃いしている合奏など、盛り沢山の内容は、全九校のいずれでも大好評でした。(鶴澤賀寿)

糸あやつり人形一糸座 学校巡回公演

令和五年度の糸あやつり人形一糸座の学校巡回公演、六月二十日から七月七日までの間の九公演に、越孝・綾一・三寿々・津賀榮・弥々が参加しました。

演目は、『東海道中膝栗毛』『赤坂並木から卵塔場まで』『橋弁慶』『本朝廿四孝』奥庭狐火の段でした。

今年度は、参加し始めてから初めて一学期中の初夏の公演でした。午前中に人形のワークショップ、午後から公演という日も多く、ワークショップでは、生徒達が一生懸命人形を操ることを学んでいる姿が、印象的でした。

(竹本綾一)

国立劇場邦楽鑑賞会

令和五年十月十五日に国立劇場第二〇七回邦楽公演邦楽鑑賞会の浄瑠璃の会が国立劇場小劇場にて開催されました。

「未来へつなぐ国立劇場プロジェクト初代国立劇場さよなら特別公演」と銘打ち、初代国立劇場五十七年の歴史の締めくくりとなる邦楽公演でした。

『壺坂観音霊験記』沢市内の段に竹本駒之助・鶴澤津賀寿が出演しました。国立劇場建替え前の掉尾を飾る、第一人者の演奏を堪能すべく多くのお客様も来場され、華やかな演奏会となりました。

(鶴澤津賀佳)

フラメンコ舞踊団と義太夫節の共演

二〇二三年十月十七日から十八日にかけて、鍵田真由美・佐藤浩希フラメンコ舞踊団による新作公演「恋の焰炎(こいのほむら)」が日本橋公会堂で行われ、竹本越孝、鶴澤三寿々、鶴澤賀寿が出演しました。

十七日は昼夜、十八日は昼の計三回公演。古典に基づいた創作舞台で、出演者はフラメンコとギターのみならず、日本舞踊、津軽三味線、太鼓、義太夫節という様々なジャンルの演者によるコラボレーションでした。

まず義太夫節の作品のうち「恋の焰炎」に適した題材は何か、という打ち合わせからスタートしましたが、日本舞踊のレパートリーでもある『狐火』『蝶の道行』は日本舞踊とフラメンコの群舞による見事な新しいステージとなりました。また『玉手御前』は、フラメンコ舞踊家による玉手と俊徳丸との情熱的な絡みを、古典と新作を織り交ぜた義太夫節で表現しました。

異色だったのは高村光太郎の詩集『智恵子抄』の「梅酒」を義太夫節に仕立てた作品。繊細且つ力強いフラメンコのステップに津軽三味線も加わり、音楽としても舞踊としても大いに盛り上がりました。『ペテネーラ』など歌やギター、手拍子に支えられたフラメンコ舞踊も披露され、全体的にとてもエキサイティングな舞台に仕上がりました。この公演に作曲者、奏者として参加することが出来て、実に貴重な経験となりました。(鶴澤三寿々)

大阪の女義と瑠璃の会

「義太夫の本場」と言われる大阪ですが、女義に関しては東京以上に後継者が減少していた上に、二〇一〇年の人形浄瑠璃因協会の解散により、かなり危機的な状況にありました。年二回の「因協会女子部公演」も第百回を目前にして開催のめどが立たず、そのまま何年も月日がたった頃、この実情を憂っていた竹本土佐恵師が、竹本住蝶さん、豊澤住輔さんにお声をかけ「女流義太夫瑠璃の会」が発足しました。大阪で約八年間途絶えていた素浄瑠璃の定期公演を復活し補助金なども利用しながら、今後も継続的に活動をするための新たな礎となりました。毎年三月初旬に開催している「瑠璃の会」は今年で第八回を迎えます。発足当初四人だったメンバーは現在九人になりました。最近では大阪の乙女文楽座との共演も実現し、各一門の演奏会、体験教室、学校公演など精力的に活動をしています。まだまだ人手不足なのが悩みですが、かつての大阪女義界の賑わいを取り戻せるよう頑張りたいと思います。

(鶴澤駒清)



2023年3月「第7回瑠璃の会」  
トークコーナー

協会公演のチラシを担当して

私が義太夫協会から女流義太夫定期公演のチラシのデザインを依頼されたのは、二〇〇八年の九月公演からでした。デザイン会社に勤めながら、第五六期義太夫教室を卒業し、その後、鶴澤津賀寿師のもとでお稽古をしていましたが、多岐にわたる協会の仕事の助けになればということで、何かの折に津賀寿師が私を推薦してくださったそうです。

作業を始めるにあたり、協会からはデザインにおいての注意事項は特別なかったのですが、まず、見出しやメインの文字に勘亭流は使わないようにしました。伝統芸能⇨勘亭流、筆文字、という固定観念を取り払いたかったからです。その代わり、組んだ時に美しく見える明朝体を色々試してみました。一方であまり伝統邦楽とかけ離れたデザインになってはいけないのと、スペック（詳細情報）や演目解説などはきちんと情報として伝えなければいけないので、そこはオーソドックスなゴシック体や明朝体を使いました。

また、今までにないようなデザイン・アプローチをしたいと考え、背景には趣味で集めていた着物の生地・端切れなどを使ってみました。当時の伝統邦楽の広告やチラシでそのような素材を使ったデザインは、意外にもあまりなかったのです。その後、国立能楽堂のチラシが能衣裳の一部を背景にしているのを見、その頃から伝統邦楽・伝統芸能関係の告知デザイン全体が以前の「固定観念」にとらわれないものに変わってきたように思います。数年して、別ジャンルの伝統邦楽の若い方

ら「女流義太夫のチラシは他と違うので、ぜひデザインをお願いしたい」と言われた時は「我が意を得たり」と嬉しくなりました。現在は、伝統邦楽、伝統芸能関係の仕事も増え、他のレギュラーの企業広告の仕事とはちょっと違う頭の切り替えもできて、私の趣味の拙い知識も生かせる、という所が、デザインの仕事をずっと続けて来られた理由の一つかもしれません。

最初のチラシのデザインから十五年たち、今は着物の生地や端切れも毎回は使いませんが、基本的な考え方は全く変わっていません。文字部分はすっきりと見やすく、分かりやすく、そして各種伝統邦楽のチラシが集まった中であっても「華やかで目立って、手に取ってもらえる」ようなデザインを心がけています。これはチラシのデザインだけでなく「女流義太夫」にも共通する事かもしれないな、と思っています。

(グラフィック・デザイナー 大内弘子)



一番印象に残っている平成三年（二〇一〇年）八月の定期演奏会チラシ。撮影から立ち合いました。

新シリーズ  
義太夫とわたし

遅れてきた応援団

NHKを退職して数年後、関連会社で浪曲番組の字幕制作を担当したことがきっかけで、玉川奈々福さんの追っかけをしていました。義太夫に初めて出合ったのは、奈々福さん、竹本越孝さん、鶴澤寛也さんが出演された「のう・じょぎ・ろう」公演で、筋を追うのが精一杯、正直難しいという印象でした。

その年の十月、素人の興味本位で参加した祖先祭の懇親会（隣の席は原道生会長）で、たまたま竹本京之助さんから竹本駒之助師匠と鶴澤津賀寿さんのCDがあると聞いて、すぐに買わせていただきました。その後、女義の公演に足を運ぶようになるうち、この芸を受け継ぎ伝えようとしている皆さんの一所懸命さに心を打たれ、応援したいと思いました。本腰を入れて義太夫を聞くようになって五年くらいですが、太夫の語り分けの芸の奥深さ、三味線の華やかな連弾きを楽しみに聴いています。

古くからの義太夫ファンの方は昔の名人師匠方の演奏を聴いていて羨ましい。遅れを取り戻すべく（？）、何より一回でも多く演奏会に行くことを心がけています。協会HPの会報バックナンバーにも目を通してあります。創刊号から読めるのはすごいです。第五号の豊澤仙廣師匠の「自分が生涯を懸けた芸を伝えることのできる後継者を」という言葉に心が震えました。そして、ファンの方達の義太夫愛に支えられ続けてきた芸能なんだと改めて感じています。

(元NHK報道番組チーフプロデューサー 宮下孝弘)

特別企画 大島真寿美氏インタビュー

猛暑が続いた昨年の七月末に大島真寿美氏にお会いする機会を得ました。文楽の世界を扱った『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』で令和元年に第一六一回直木賞を受賞なさった、皆様よくご存じの大島氏です。ぜひ一度お目にかかってお話を伺いたく、豊竹呂太夫師匠に仲介の労をとって頂き、今回のインタビューが実現しました。

大島氏との待ち合わせ場所に行き、「大島先生ですね」と声をかけると、「その大島先生はやめて下さ〜い、大島さんでいいです」と笑っておっしゃり、緊張しているこちらの気持ちを一気にほぐして下さいました。作家として鋭い目と耳をもちながら、自然体で偉ぶらず、竹のようなしなやかさを持った素敵なお方でした。



©文藝春秋

編集部（以下編集）…『渦』を執筆するのに当たり、膨大な資料をお読みになったそうですが、義太夫も習われたとか。

大島（以下大島）…はい、義太夫協会で義太夫教室があることを知ったのですが、名古屋在住で通えず断念したところ、文藝春秋の編集者の方が大阪で「発声ゼミ」があると調べて下さり、一緒に申し込んでくれました。

編集部…どんなお稽古でしたか？

大島…『傾城阿波の鳴門』をテキストに、「ととさんの名は〜」といったせりふのところを主に何遍も繰り返し大きな声を出すところから始まりました。川の向こうに届くようにもっと大きな声で、もっと、もっと、とご指導があり、頑張って声を出していたら最後には顎が、がくがくしてしまいました（笑）。

編集部…その時の講師が、呂太夫師匠だったのですね。

大島…そうですね。呂太夫師匠には、本当にお世話になりました。お会いした時は、すでに『渦』の連載（オール読物）が始まっていたので、いろいろと教えて頂いた事は、主に続編の『結』の方に入れました。『渦』は、妹背山婦女庭訓の作者近松半二が主人公ですが、『結』は半二の娘おきみらの、群像劇になっています。師匠が『渦』を読まれ、「太夫が出ていきへんな」とおっしゃったので、『結』には、出てきます（笑）。半二の娘は私の創作ですが、他はほとんど実在の人物です。

編集部…チャリ場が得意で、わくわくする浄瑠璃を語るという太夫が出てきますが。

大島…耳鳥斎（にちょうさい）ですね、実在の人物です。この人の作に『入間詞長者氣質（いるまことばちょうじゃかたぎ）』持余屋の段というのがあるのですが、呂太夫師匠が国立劇場で演ったことがあるのを教えて下さり、テープを取り寄せました。

『結』の刊行後、「文春文楽&落語の会」では鶴澤清介師匠の三味線で語って下さったり、師匠とのご縁は、対談で一緒したり今もどんどん広がっています。

\*

編集部…執筆なさっていて、文体など義太夫の影響はありましたか？

大島…影響というより、私の目指すもの、方向性が義太夫の文体―語りの文体に合致した、ということだと思えます。義太夫は、平たくいうとせりふ（詞〈ことば〉）を言っていたかと思うと三味線が入ってメロディ

アスな部分に滑らかに移行していく…

編集部…その繰り返しですよね。大島さんの文章も会話の部分と地の文の境目がスムーズで、まさに渦のごとく読者を大島さんの世界へ巻き込んで、物語が進行していく…この『渦』で、令和三年には、第七回高校生の直木賞も受賞されました。

大島…高校生の直木賞とは、全国の高校生を募って議論を戦わせ、直近一年間の直木賞候補作から今年の一作を選ぶ試みなんです。過去の受賞作を調べてみたら、（本家直木

賞と) 一作もかぶっていないんです。『渦』が、初めてのダブル受賞となりました。編集・史上初の快挙ですね。どんな感想がありましたか？

大島…半二が、弟分に先を越され悶々とするところがあるのですが、そこに共感し自分事としてとらえて『渦』を読んでくれました。

編集…文楽を知らなくても、関係ないのですね。大島…若い人は、頭が柔らかいです。又、『渦』を読んで初めて文楽に行ったと聞くと、とても嬉しいです。

編集…相対的に古典芸能の催しに来て下さるお客さんが少ない昨今、集客とかどうしたらいいでしょうか？

大島…やはり若い人に来てもらう事ですね。編集…これからは、新作なども必要と思われるますか？

大島…必ずしもその必要はないと考えています。文楽の『義経千本桜』や『加賀見山田錦絵』に、甥っ子を連れて行った時、難しいかなと心配しましたが、理解して楽しんでいたようです。どんなに良い物でも観てもらおうには、まず劇場に足を運んで、椅子(客席)に座ってもらわなくては。

編集…学割だけでは、だめですか？大島…そうですね。来てもらうためには、もっと、もっと強力なシステム作り、工夫をしないとい。

編集…『結』に入りが悪い対策として、百人

に無料でみせる話が出てきます。

大島…これ、実話なんですよ。損をして得をとれ、ということ。この策が見事に当たり、人形浄瑠璃の人氣が盛り返します。

編集…江戸時代にも“ご招待”があったのですね。やはり何が必要なんでもお客さんに来てもらうという気概が必要なんですね。それにはどうしたらいいか。ほかにヒントになるお話が『結』にいろいろと出てきて、本当に参考になります。『結』の次は、どんな作品になりますか？

大島…今、昭和四十五年頃の少女漫画『マーガレット』の編集部を扱った小説「うまれたての星」を書いているところです。

編集…『マーガレット』ですか、とても懐かしいです。夢中になって読んでいました。どんな内容になるか、待ち遠しいです。

大島…あと、“妹背山”をテーマにした物語が書けたらと思っています。

編集…現代語訳とは違う、例えば三島由紀夫の『近代能楽集』(能の謡曲を近代劇に翻案したもの)のような作品になるのでしょうか？ 今からとても楽しみです。

大島…でも、出して下さる出版社があるかどうか。

編集…いや、是非挑戦して頂きたいです。編集…ところで、義太夫のお稽古は続けていらっしゃるでしょうか？

大島…コロナ禍になり、高齢の両親がいるので控えていたのですが、是非再開したいと思っています。普段黙々と机に向かって仕事をしていますので、(義太夫のお稽古で)大きな声で語るのとても楽しいです。呂太夫師匠もお忙しいのにプロのお弟子さんだけでなく、我々の面倒もよく見てくださいます。

編集…発表会にもお出になったことがあるとか。何を語られたのですか？

大島…よし、つ、ね、…ここまではとても言えませんが。

編集…是非ここで言って頂きたかった、大島…(笑)

編集…残念！ 全貌？が見えぬまま、あっという間に時間が来てしまいました。今日は、お目にかかれて、とても嬉しかったです。お忙しい中お時間を頂き、本当に有難うございました。(インタビュー 竹本佳之助)

**おもしろい**  
**大島真寿美**

一九六二年愛知県生まれ。九二年『春の手品師』で文学界新人賞を受賞しデビュー。二〇一一年刊行の『ピエタ』は第九回本屋大賞第三位。一九九一年『渦 妹背山婦女庭訓魂結び』で、第一六一回直木賞受賞。同作は、二〇年第七回高校生直木賞も受賞。『チョコリエッタ』(映画化)『虹色天気雨』『ピターシユガー』(両作品をもとにNHKでドラマ化)『戦友の恋』『ゼラニウムの庭』『ツタよ、ツタ』『モモコとうさぎ』など著書多数。

『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』  
『結 妹背山婦女庭訓 波模様』  
『文藝春秋より絶賛発売中！』

◆ 訃報 ◆

池田弘一氏 (神田外語大学名誉教授)



二〇二三年五月十五日に老衰のため逝去されました(享年九三歳)。葬儀は近親者のみで執り行われた由。弔問・香典・供花等は、固く辞退したい旨、ご遺族からご連絡を頂きました。

義太夫協会の理事(二〇〇七年～二〇〇九年)・監事(二〇一〇年～二〇一三年)を歴任され、義太夫教室の講師や、定期演奏会の解説等たいへんお世話になりました。二〇〇九年三月国立演芸場での女流義太夫演奏会「仮名手本忠臣蔵 お軽を追って」では公演を全面プロデュースされ、好評を博しました。義太夫との出会いは、池田氏が早稲田の学生の頃——講談にハマり本牧亭に通う内に、同じく本牧亭で公演があった義太夫も聴くようになったとの事です。それから長きに亘り「義太夫」を応援して下さいました。他の邦楽にも造詣が深く、長唄等で鍛えた張りのあるお声が、今でも耳に残っております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

永谷浩司氏 (永谷商事創業者)



二〇二三年六月二日に逝去されました(享年九五歳)。永谷氏は戦後、上野ガード下で手荷物預り所を開業後、合資会社永谷浩司商店を経て、一九

五九年に永谷商事株式会社を設立されました。マンション・ビルの建築、分譲を手掛けるとともに、日本の伝統芸能の分野にも活動を広げ、都内四力所に演芸場を開き席亭となりました。現在、お江戸上野広小路亭で奇数月に開催しています「じよぎ」公演は、「若手の勉強会をやらせて欲しい」との竹本越孝よりのご相談に、永谷氏が応えてくださる形で始まりました。また、お江戸日本橋亭の「女流義太夫演奏会」で掲げられている幟は、二〇一一年に日本橋亭公演が始まる際、永谷氏から「女流の勢いがありますます昇っていくように」とご寄贈いただきました。当協会の相談役としても長年、惜しみない協力と多大なご後援をいただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

原道生氏 (義太夫協会会長)



二〇二三年十一月二日に逝去されました(享年八七歳)。二〇〇八年より義太夫教室入門コースで「義太夫節の歴史」を担当。二〇一三年より義太夫協会監事。二〇一六年、義太夫協会会長に就任、以来七年間、協会のためにご尽力いただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

◆プロフィール  
一九三六年東京生まれ。一九六〇年、東京大学文学部国文科卒。一九六六年同大学院博士課程単位取得満期退学。東京大学文学部助手。一九七一年、横浜市立大学文学部助教授。一九八一年、明治大学文学部教授。二〇〇五年、同図書館長。二〇〇七年、同大学名誉教授。瑞宝中綬章受章。第四六回河竹賞、第三六回角川源義賞受賞。  
【著書】『近松浄瑠璃の作劇法』(八木書店)、『近松門左衛門(新潮古典文学アルバム)』(新潮社)、『古典に見る日本人の生と死』(共著笠間書院)、『近松浄瑠璃集(日本古典文学体系)』(共著岩波書店)



## 連載 名優と義太夫節

## 【第七回】十七世中村勘三郎

老若男女八百以上の役をこなし、ギネスブックに登録された十七世中村勘三郎。義太夫狂言の役々にも数多くの当り役があったが、一度しか勤めなかった「吉野川」の大判事や「千本桜」の権太も語り草となっている。晩年も初役への意欲は衰えず、「春日村」の紀有常について竹本米太夫に調べさせていた。

初世中村吉右衛門と三世中村時蔵を兄に持ち、若い頃は上方劇壇で修業したので、権太も二世実川延若と義父六世尾上菊五郎を学んでいた。小心なところもあり、菊五郎の弟子に「親父さんとおんなしakai?」と訊き、「：エエ一緒ですよ」と答えると安心したという。

気分屋で竹本連中泣かせ。「紅葉狩」の山神で何か気に入らないことがあり、へとくとく起きて帰られよ」の「トントン」をわざと曲の拍子からはずして意地悪。それが劇評では「山神の魔の間」と評された。このようなことができるのも、三味線の名手であり、味わい深い小唄は吹込んで市販されるほどの素養があったからである。「袖萩祭文」ではそれらが活かされた。

竹本は、吉右衛門以来の豊竹岡太夫が若手の鶴澤絃二郎と組んで勤めていたが、岡太夫には「こうして欲しい」と注文が出せない。そこで絃二郎に注文した。あるとき竹本楽屋のインターホンで「絃二郎さん、中村屋の先生がお呼びです」と通じてきた。岡太夫は

「出番前のあわただしいときに失礼な！絃ちゃん、行くことはありませんッ！」。そうするとインターホンの向こうから勘三郎の声で「：聞こえてるよォー」。その後、舞台裏で床に着席すると、勘三郎は俊寛の拵えで両手を胸元でぶらぶらさせながら、「絃ちゃん：来てくれて言ったら来てくれたっていいじゃないか：」と恨めしそうに訴えたという。

勘三郎は、俳優が揮毫してくれた三味線胴板を額装して自宅に飾っていた。しかし勘三郎のものだけがない。勘三郎が楽屋で「三茄子」を色紙に揮毫していて、「絃ちゃん、いだろ！」と見せたところ、「結構ですねぇ：タニシですか？」に激怒。「ナ・ス・ダ・ヨォーッ！」。以後何度胴板を持参しても揮毫してくれなかったという。

岡太夫没後は米太夫・野澤松三郎で出し物をするが多かったが、六世中村歌右衛門付きの豊澤瑩緑も好み、「藤雄さんはいい三味線弾きを持っていてうらやましい」ともらっていたという。最晩年は竹本喜太夫・豊澤重松を起用した。どんなキッカケでも三味線方が「ハッ！」と掛声をするご機嫌であった。これらはセリフ尻に盛り込んで掛けるのが自然なのだが、ことさら別に掛けることを好んだ。

格別の人以外には愛想がなく、廊下で挨拶しても返してくださらなかったが、こんにちそういう傲岸不遜な俳優はいない。ご機嫌のときは竹本楽屋へ竹葉亭の塗箱弁当を届けたり、嵐山吉兆へ招待もしたが、とにかく機嫌

不機嫌の差が激しい人であった。

文楽座の八世竹本綱大夫・十世竹澤彌七と親交があり、初世松本白鸚が二人を招いて「日向島」を特別上演すると、勘三郎も負けじとばかり「河連館」や「二月堂」を上演した。また安藤鶴夫作の「芸阿呆」に感動し、綱大夫・彌七の演奏による録音で歌舞伎座の出し物にした。筆者二十歳くらいのころ、楽屋に呼ばれておそろおそろ入ると、「あんた綱さんの録音をよく聴くんだったね：ウン、結構結構！芝居の人はね、上手な人もいるけれど下手な人もいるからね。いい録音を聴いてね」とお言葉も賜ったことがある。

一九八八年一月、歌舞伎座で「俊寛」を出した。このとき竹本の太夫と三味線方同士でイキが合わず、舞台上で太夫が三味線方に毎日高圧的な態度を取っていた。勘三郎はたまたま楽屋口でその三味線方と一緒に、「あの太夫の気質は私はよく承知していますよ。あなたつらいだろうけど我慢して千種楽まで弾いてくださいよ。お願いしますよ」と声を掛けた。その公演途中より勘三郎は休演し、これが最後の舞台となった。

その後、子息の勘九郎が十八世を襲名したが、こちらも話題にことかかない人であった。また次回申し上げることとする。

\*文中敬称を略しました。

(歌舞伎義太夫・太夫 竹本葵太夫)

協会・正会員の主な動き

令和五年七月～十二月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催公演

「女流義太夫演奏会」

七月十七日(月・祝) 紀尾井小ホール

八月二十日(日) お江戸日本橋亭

九月二十日(水) お江戸日本橋亭

十月十三日(金) お江戸日本橋亭

十一月二十日(月) お江戸日本橋亭

十二月十七日(日) 紀尾井小ホール

正会員主催公演(協会後援分)

依頼公演・協力公演(\*印)

「じよぎ」\*お江戸上野広小路亭

七月一・二日、九月一・二日、

十一月一・二日

「ぎだゆう座」\*お江戸上野広小路亭

八月一・二日、十月一・二日、

十二月一・二日

「阿波路会」七月十七日(月)

徳島県立阿波十郎兵衛屋敷

「和装・邦楽体験」\*七月二四日(月)

八月二一日(月) お江戸上野広小路亭

「第十九回竹本越孝の会」

八月二六日(土) 紀尾井小ホール

「第二回花の会」

九月九日(土) 日本橋公会堂

「第十四回竹本土佐恵の会」

九月二三日(土) 内幸町ホール

「女流義太夫 涙と笑い(再)」

～一谷嫩軍記より～

十月八日(日) 浅草公会堂第二集会室

【普及】

義太夫節保存会・義太夫協会主催教室

◆義太夫一日体験教室

八月六日(日) 芸能花伝舎

◆第七五期義太夫教室

〔実践コース前期〕九月～十二月(各土曜)

豊川稲荷文化会館

依頼事業

◆学校巡回公演…文化庁主催「芸術文化による子供の育成事業―巡回公演事業」(制作…

古典空間)

「語ってみよう! 義太夫節」事前ワークショップ

プと本公演全八校(うち令和五年内六校)

《本公演》

九月二五日(月) 板橋区立中根橋小学校

二六日(火) 渋谷区立笹塚小学校

二八日(木) 杉並区立富士見丘小学校

二九日(金) 神栖市立息栖小学校

十月三日(火) 茨城県立結城特別支援学校

四日(水) 茨城県立協和特別支援学校

「三味線ナビ」本公演全九校

協会・正会員の今後の動き

令和六年一月～六月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催公演

「女流義太夫演奏会」

一月十八日(木) 深川江戸資料館小劇場

二月十五日(木) 深川江戸資料館小劇場

三月二十日(水・祝) 紀尾井小ホール

四月二六日(金) ティアラこうとう

五月二四日(金) 深川江戸資料館小劇場

六月二一日(金) ティアラこうとう

正会員主催公演(協会後援分)

依頼公演・協力公演(\*印)

「ぎだゆう座」\*お江戸上野広小路亭

二月一・二日、四月一・二日、

六月一・二日

「じよぎ」\*お江戸上野広小路亭

三月一・二日、五月一・二日

「乙女文楽第十三回公演」

一月二十日(土)・二一日(日)

川崎市国際交流センターホール

「第二一回花のように香れ 女流義太夫」\*

二月十八日(日) 蔵市立文化ホールくるる

「第五三回邦楽演奏会」\*

三月十六日(土) イイノホール

「第二回横須賀女流義太夫演奏会」

六月三十日(日) 横須賀芸術劇場

【普及】

義太夫節保存会・義太夫協会主催教室

◆第七五期義太夫教室

〔実践コース後期〕一月～三月（各土曜）

豊川稲荷文化会館

◆第七五期義太夫教室卒業発表会

三月九日（土）浅草公会堂第二集会室

依頼事業

◆学校巡回公演…文化庁主催

「芸術文化による子供の育成事業―巡回公演事業―（制作…古典空間）語ってみよう！義太夫節」事前ワークショップと本公演

全八校（うち令和六年分二校）

《本公演》

一月十五日（月）北九州市立牧山小学校

十六日（火）福岡市立香稜小学校

■寄付・寄贈■

左記のご寄付・ご寄贈を頂戴いたしました。

誠に有難うございました。（五十音順掲載）

寄付 鈴木多美様／日本素義会様

協会事務所移転に際し…原道生会長以下正会員有志

寄贈 鶴澤津賀寿 肩衣・袴一式

会報編集委員／竹本佳之助・鶴澤賀寿

鶴澤津賀花・竹本越里

印刷／京成社

酒と器  
押上文庫

〒131-0045  
東京都墨田区押上3丁目10番9号  
(スカイプリーから徒歩8分ほど)  
TEL 03-3617-7471  
E-mail: oshiagebunco@gmail.com

『寿詞繭依絲』YouTubeに登場！

昨年5月の女流義太夫演奏会において、鶴澤津賀寿人間国宝認定記念として編曲された『寿詞繭依絲（ことほぎてまゆのよりいと）』。企画：鶴澤津賀寿、構成：村尚也によるこの曲は、義太夫節の名曲をリレー形式に繋ぎ、竹本駒之助、鶴澤津賀寿以下、計13名による賑々しい演奏で、大好評を博しました。公演チケットも早々に完売となったため、ご来場いただけなかった方や、もう一度あの華やかな雰囲気を感じたいという皆様のために、全編を公開いたします。



〈公開期間〉  
2024年1月15日（月）～2024年2月14日（水）  
1か月間の期間限定、お見逃しなく！

義太夫協会公式YouTubeチャンネル  
<https://www.youtube.com/c/義太夫協会>

紋付 肩衣 袴 一式承ります

すいこう苑  
コバヤシ

〒343-0044  
埼玉県越谷市大泊249  
TEL 080-1155-3942  
FAX 048-975-2179  
MAIL m-24-kobayashi-718@docomo.ne.jp

義太夫用三味線・張替、水牛駒・見台・湯呑、  
制作修理 その他、各流三味線及び付属品の御注文承ります。

きむら

〒151-0066 東京都渋谷区西原 1-26-14  
TEL/FAX 03-3466-2156  
P.H.S 070-5457-5687



**永谷**の演芸場は  
日本の伝統芸能を応援しています

- ◆お江戸と野広小路亭
- ◆お江戸両国亭
- ◆新宿永谷ホール (Fu-)
- ◆お江戸日本橋亭  
(2024年1月より当面の間休館致します)

永谷商事株式会社  
☎0422(21)1796  
公式 HP <http://www.ntgp.co.jp/>



一九六三年発足

まさには「継続は力なり」。  
これからも日本素義会を  
よろしく願っています。

第百一〇回日本素義会 令和六年六月二十二日開催予定。

日本素義会

昭和、平成、令和と  
素義の先輩諸氏、そして  
女流義太夫のみなさまの  
熱い思いに支えられてきました。